あるとき某 T.V.番組でテノール歌手の錦織健さんが、終演後コーラスの人に聞くと「ソロに対抗して負けないように歌っていました」という答えが返ってきたという話をしていた。同時にオペラは相手の動きを見てバランスを取る「協調性」だと説いた。

オペラやコーラスとの共演に限らず舞台の上では誰しも全力を尽くすが、それが「相手より目立ちたい」になっては良い結果には結びつかないだろう。錦織さんのような声の特性と実力を持つ人とコーラスが張り合ってもさほど影響はないが、それ以外の場合は「張り合い」はひとつの完成品として美しくはない、と私は感じる。特に少人数編成の舞台で張り合った場合、吹奏楽器と声が張り合ったら音が割れてうるさい。弦楽器の場合はチグハグ感が否めない。もし楽器が歌い手に協調して一歩退いてくれたら、そこに「マイナスの美学」が生じると思う。自分の実力を損なわず「協調性」を発揮できる演奏者は高度な実力の持ち主で音楽の本質が身に染みた人だとも思う。

また図らずも「気分が乗った」が故に起こる「張り合い」もある。演奏者が歌に影響されて乗る。しかしその時、演奏者には単なる「乗り」だけでなく「自分の方が目立ちたい」感があるような気もする。もしそれがないとしたら歌に引きずられて自己陶酔してしまった単なる自己満足の音楽を奏でる人である。そのとき頭の中から観客の姿は消えているだろう。もちろん演奏者にとって周りの音は近すぎて自分の音の程度が判別しづらいかもしれない。けれど相手に協調する気があれば感覚でわかると推察する。実際そういう演奏者を目にしたから。要するに一つの音楽を作るためにバランスを取って協調できるか、自分が目立ちたくて自分に協調させたいかの違いではないかと思う。私は舞台上で相手と合わせようとしている歌手、演奏者に好感を持って引き込まれる。目立ちたい自己陶酔的演奏はそっちのけでその音に集中する。それはとても心地よい。そしてその人たちは心底楽しめる素敵な音楽の舞台を作れると思う。

また「乗り」について時々「きょうは大いに乗りました」「120%燃焼しました」という表現をする人がいるが、私はそれを信じない。100%を超えるものが素晴らしいとは思えない。120%の満足は 20%分が自己満足だと思う。だいたい 120%燃焼した人がアンコールを何曲もやるか？これはある人が言っていたことだけれど私も同感。全力をオーヴァーしたらアンコールなんてできないはずだ。燃焼しきってよくペラペラお喋りする余裕が残っているね、とは私を含めた口さがない雀たちの言うところ。ポール・モーリア氏はアンコールを 2 曲で止めた。シャルル・アズナヴール氏はアンコールをやらなかった。たとえ拍手が鳴り止まなくても。横山幸雄氏は「演奏の燃焼度」が充分観客に伝わっていたと思う。アンコールがなくて当たり前の状況が素晴らしかった。挨拶もお辞儀だけで無言であったけれど、むしろ言葉はいらない。言葉によって演奏の感動が現実に引き戻されるのなら。燃焼したかどうかは観客が判断する。

そして協調するより協調させたい自己陶酔型の演奏者は、本プログラムではなくリラックスしたアンコールで実力を発揮する。「何故これを最初から見せてくれないの？」である。そのとき私は「このアンコールが今日のプログラムだったらよかったのに」と思う。私の中で舞台の上の共演者同士の争いは「負けるが勝ち」協調できた人に軍配が上がる。相手を量る耳と感性は自分の実力を貶めることにはならないと思う。変にプライドの高い協調性のない音楽だけが観客を置いてきぼりにする。　(2012.9.23)